

# 吉田松陰と高杉晋作 — 思想の継承と展開 —



三宅紹宣<sup>みやけ しょうのぶ</sup> (広島大学名誉教授)

一九四九年広島県生まれ。著書『幕末・維新期長州藩の政治構造』(校倉書房)、『幕長戦争』『幕末維新の政治過程』(吉川弘文館) ほか多数。

はじめに

高杉晋作は、久坂玄瑞と並んで松下村塾の双璧と呼ばれ、吉田松陰の志を継いだと言われ、数多くの伝記が刊行されている。晋作の伝記として戦後における主なものとしては、奈良本辰也『高杉晋作』(中公新書、一九六五年)、一坂太郎『高杉晋作』(文春新書、二〇〇二年)、梅溪昇『高杉晋作』(吉川弘文館、二〇〇二年)、海原徹『高杉晋作』(ミネルヴァ書房、二〇〇七年)、青山忠正『高杉晋作と奇兵隊』(吉川弘文館、二〇〇七年)、林田慎之助・亀田一邦『高杉晋作・久坂玄瑞』(明德出版社、二〇一二年)等がある。

しかし、松陰のもとでの修学状況や晋作の行動への松陰思想の影響についての詳細は、意外と明らかになっていない。そこで本稿では、晋作の生涯における三大重要画期である奇兵隊の結成、下関決起、幕長戦争を中心として、その行動と思想における松陰思想とのかわりについて重点的に解明してみたい。

## 一 高杉晋作の吉田松陰のもとでの修学

晋作の松下村塾への入塾時期については、必ずしも明確ではない。松下村塾への出入りを確実に証明するのは、安政四年(一八五七)八月に書かれた「送無逸東行序」(『高杉晋作史料』一、マツノ書店、二〇〇二年、一五頁。以下、『高杉晋作史料』一、一五のように略記する)である。吉田稔麿の江戸出府を激励する送別の序であり、「予之始詣松下村塾也、有一生退然<sup>(参)</sup>諸生之後、神彩英暢眼光射人」と、私が初めて村塾に詣でると、諸生の後に稔麿がおり、すぐれた風采、英暢、眼光は人を射たと書いている。

入門に至る過程は、後になって元治元年(一八六四)六月七日「投獄文記」に記しているものではあるが、「某<sup>それがし</sup>少而無頼好擊劍、期为一箇之武人、年甫十九、謁先師二十一回猛士、始聞讀書行道之理」(『高杉晋作史料』二、一七〇)と回想している。つまり、少にして無頼擊劍を好み、武人たらんと欲していたが、十九歳の時、吉田松陰に謁し、初めて讀書行道の理(真理)を聞

いたとしている。松陰のもとで初めて真理に出会うことが出来たと、人生の画期であったその感動を述べている。

入門して間もない頃、塾内で禁煙の議が起こった。晋作はこの同盟に参加し、喫煙を断然割去したと松陰に語った。これに対し松陰は、「春風行年十九、鋭意激昂、学問最も勤む、其の前途、余固より料り易からざるなり」（安政四年九月三日「煙管を折るの記」）「丁巳幽室文稿」『吉田松陰全集』四卷、大和書房、一九七二年、一一七頁。本稿では特に断らない限り大和書房版を用い、以下、『吉田松陰全集』四、一一七のように略記する」と、学問に勤めているとして、その前途を期待している。

安政五年（一八五八）二月十二日、松陰は晋作の勉学について指針を与え、「僕、足下と交を納るるは、徒に読書稽古の爲めに非ず、固より将に報国の大計を建てんとすればなり」（「高杉暢夫に与ふ」）「戊午幽室文稿」『吉田松陰全集』四、三二〇）と述べている。報国の大計とは、国家の恩に報いる大きなはかりごとであり、勉学は読書稽古だけではなく、国家問題について積極的に考えるべきだとしているのである。このような指導によって、晋作は政治問題について考える視点を深めていった。

二月二十九日、長州藩当職の益田弾正は、明倫館において書生達に「対策」の題を与え、時務を論じさせた際、晋作は、「奉彈正益田君書」（『高杉晋作史料』二、一八四〜一九〇）を書いた。この「対策」は、「諫幕府之策」「富国強兵之本」「富国之本」「富

国之末」「強兵之本」「強兵之末」の各章から成り、「強兵之末」では、「強兵之末、在使二州之人、学洋術也、然学洋術、不宜不知其次也、不知其次、而学之、猶不学也、故欲学洋術、必先精熟百羅屯、而後可鍊巨砲、造大艦、築砲塢也」と、強兵の末は、防長二州の人をして「洋術」（西洋術）を学ばせることにあり、「洋術」を学ぼうとすれば、必ず先ず百羅屯（小隊）に精熟し、その後に巨砲を製造し、大艦を製造し、砲塢（砲台）を築造すべきとしている。この「対策」に対して松陰は、「強兵の末論の如きは、反覆して益々喜ぶ」（「暢夫の対策を評す」）「戊午幽室文稿」『吉田松陰全集』四、三五二）と、高く評価している。晋作の西洋術の必要性の提起と、それに対する松陰の高い評価が注目される。

六月十九日、日米修好通商条約が勅許を待たずに調印されると、全国に伝わった。このことを知った松陰は、七月十三日、「大義を議す」（「戊午幽室文稿」）『吉田松陰全集』四、三七二〜三七五）を書き、討幕論を唱えた。ただし、文の後半では、幕府への二百年の恩義と忠告を主張している。十六日・十七日、「兵庫の海防を辞せんことを議す」を書いて、長州藩の兵庫警衛の任務を返上すべきとした。そして、「此の議原と高杉暢夫に出づ。吾れ深く其の識に服し、問ふるに己れの説を以て、一篇を構成すること右の如し」（同右書、三八六）と、この議は晋作の提案を生かしたものであり、晋作が松陰に影響を与えるまでになっていることがわかる。

晋作は七月には江戸遊学に出発する準備を進めた。松陰は、七月十八日「高杉暢夫を送る叙」を与えた。ここでは、晋作が入塾してからの様子を次のように回想している。

余嘗て同志中の年少多才なるを歴撰し、日下玄瑞を以て第一流と為せり。已にして高杉暢夫を獲たり。暢夫は有識の士なり、而れども学問蚤からず、又頗る意に任せて自ら用ふるの癖あり。余嘗て玄瑞を挙げて、以て暢夫を抑ふ、暢夫心甚だ服せざりき。未だ幾くならずして、暢夫の学業暴かに長じ、議論益々卓く、同志皆為めに衽を斂む。余事を議する毎に多く暢夫を引きて之れを断するに、其の言往々にして易るべからず。(同右書、三三七)

このように、入塾したころの晋作は、有識の士ではあったが学問は早くなく、また、人の意見を容易に聞かないところがあった。そこで松陰は、ライバルとして久坂玄瑞を設定した。そうすると晋作の学業はたちまち長じ、議論はますます高く、同志はみなおそれつつしむようになった。松陰は、事を議することに多く晋作を引用して判断を下し、その言は軽視することができなくなったとその成長を喜んでいる。

晋作は、七月二十日、江戸遊学に萩を出発し、八月十六日、江戸に着いた。昌平齋に人数の明きがなく、大橋訥庵の思誠塾に入ったが、講義内容に失望し、十月頃にはほとんど出入りしなくなった。

十一月四日、昌平齋の人数が明いたので、入校し、書生寮に入った。この間、政治情勢は九月に安政の大獄が始まり、これに対し松陰は、十一月六日には塾生一七名と血盟し、老中間部詮勝要撃策を計画した。その動きは過激となり、十二月二十六日には、野山獄に再入獄した。

安政六年(一八五九)二月十五日以前、松陰は獄中から晋作に書簡を書き、「岸獄独座、諸友を回顧するに、老兄ならでは聞いて呉れる人なし」(安政六年二月十五日以前、高杉晋作宛吉田松陰書簡『吉田松陰全集』八、二二八)と、信頼を寄せている。

また、四月二十五日には、晋作のことを佐久間象山に、「高杉生、僕より少きこと十年、学問未だ充たず経歴亦浅し、然れども強質精識、凡倫に卓越す。常に僕を見て師の如くし、而して僕亦之れを重んじて兄と為す」(象山先生に与ふる書「己未文稿」『吉田松陰全集』五、三〇二)と紹介し、指導を依頼している。松陰は、獄中にあっても晋作のことを気に懸け、学問が発展するよう配慮している。

一方、晋作は、四月一日、学問の方向が大いに変じたと玄瑞に知らせ、「何卒御国之兵制之相立候様ニト勉強仕居候(安政六年四月一日付、久坂玄瑞宛高杉晋作書簡『吉田松陰全集』六、岩波書店、一九三五年、二八〇頁。以下、『定本吉田松陰全集』六、二八〇のように略記)」と、兵制に役立つ学問をしたいと述べている。五月二十四日の某宛書簡では、「前日登門之節、御示談致置

候<sup>うせい</sup>迂生洋学修業之論、如何相成候哉、何分一時も早く取り掛り不申では、次第に手おくれに相成、実以遺憾之至に御座候(中略)同し外遊之論に決し候は、願くは東京可宜と考居候(安政六年五月二十四日付、某宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、五六)と、洋学修業に一時も早く取りかかりたいとし、できれば外遊、それも東京<sup>トシキン</sup>(現在の北部ベトナム)へ行つてみたいとしている。ベトナムでは、安政五年、フランスが宣教師団保護を目的として遠征軍を派遣し、インドシナ植民地化の起源となる動きがあり、それを実見したいと考えていたことがわかる。

八月二十三日、晋作は玄瑞に宛て、「一身ニテ致ス時ハ、大軍艦ニ乗込、五大洲ヲ互易スヨリ外ナシ。夫故、僕も近日より志ヲ変シ、軍艦之乗方、天文地理之術ニ志、早速軍艦<sup>(製)</sup>製造場処ニ入込候ラワント落着仕居候」(安政六年八月二十三日付、久坂玄瑞宛高杉晋作書簡『定本吉田松陰全集』六、三七一)と、江戸築地の幕府軍艦製造所に入り、勉強をしてみたいと述べている。

晋作の軍艦修業・外遊希望は、松陰の影響を受けていると考えられる。松陰は、「幽囚録」の中で、西洋学を原書で学ぶ必要性を説き、「今宜しく俊才を各国に遣はして、其の国の書を購<sup>あがな</sup>ひ、其の学術を求めしめ、因つて其の人を立てて学校の師員と為すべし」(「幽囚録」『吉田松陰全集』二、五〇)と、留学生を派遣し、その国の書を購入し、学術を求めるべきとしている。

松陰とその門下生における「海事志向」については牛見真博氏

による研究がある<sup>(3)</sup>。牛見氏は、渡辺蒿藏・晋作について分析し、「海事志向」について、「航海や操船技術をはじめ、幕末に盛んになった日本を防禦するための方策としての造船、艦砲を含む海軍知識・技術の習得を目指す」と概念規定し、その存在を明らかにしている。

松陰は、安政五年五月二十八日の「続愚論」で、「何卒大艦打遣、公卿より列侯以下、万国航海仕り、智見を開き、富国強兵の大策相立ち候様仕り度き事に御座候」「統愚論」「戊午幽室文稿」『吉田松陰全集』四、三四八」と、航海の重要性を説いている。その具体策として、京都に文武兼備の大学校を造建することを提起している。そして、航海の事を行う順序について、次のように述べている。

航海は一科の学に相成り居り候事に付き、学校中へ此の学所一局相建て、其の学に長じ候もの入学仕らせ候儀一説に御座候。又吾が国の航海、東北蝦夷・松前より西南対馬・琉球まで、自在に通船致し候事に候へども、只今の所にては専ら船頭舸子の事に成り果て候故、武家の士にても此の術を会<sup>え</sup>得致し候もの之れなく、況して公卿の歴史をや。夫れ故学校中にて人材を選び、二十左右少壯の者を諸国の港々へ遣はし通船に託し、海勢並びに船上の事心得させ、又志あるもの十歳左右の童児をも丸に船頭に託し置き候事勝手に致させ、専ら其の術を精究致させ度く、是れ等も皆公卿より御引

立成され候事、是れ二説に御座候。和蘭陀は二百年來航  
 仕り候事にて、墨夷其の外新來の夷国とも違ひ、且つ往々御  
 国の御為めを謀り候事に付き、此の船に託し壯士數十人づ  
 つ年々広東・爪哇其の外へ御遣はし成され候事、是れ三説に  
 御座候。此の三説を以て航海の基と成され候て、清国・朝鮮・  
 印度杯の近国へ出掛け候様成され候はば、数年の内航海の  
 事は大に行はれ申すべく存じ奉り候。(同右、三四九〜三  
 五〇)

このように、(1) 学校中へ航海学の長じた者を入学させる。  
 (2) 学校中の人材を選び、二〇歳前後の青年を諸国の港へ遣わ  
 し、通船に託し、海勢ならびに船上の事を心得させ、また、一〇  
 歳前後の童児を船頭に託して、その術を精しく学ばせる。(3) オ  
 ランダ船に託して、壯士数十人づつ年々広東・ジャワその他へ  
 遣わすと、その構想を述べ、数年のうちには航海の事は大に行わ  
 れるようになるとしている。

このような松陰の思いを受けて、晋作は航海の勉強をしたい  
 と志望したと考えられる。

松陰は、幕府から東送の命を受け、安政六年五月二十五日、萩  
 を出発し、六月二十五日、江戸に着いた。七月九日、幕府評定所  
 で取り調べを受け、揚屋入りを命じられた。晋作は牢中の松陰  
 に熱心な支援活動を行い、また、書簡による指導を受けた。

七月中旬には、松陰は晋作に書簡を書き、「死して不朽の見込

あらばいつでも死ぬべし。生きて大業の見込あらばいつでも生  
 くべし。」僕が所見にては生死は度外に措きて唯だ言ふべきを言  
 ふのみ。」(安政六年七月中旬、高杉晋作宛吉田松陰書簡『吉田松  
 陰全集』八、三六八)と、死生を度外視して事に当たるよう死生  
 観を論じている。これは晋作の生涯の行動の指針となつていく。

松陰は、十月二十七日、斬刑に処せられた。晋作は、それより  
 前に帰藩を命じられ、十月十七日に江戸を發つた。萩に着いた十  
 一月十六日、松陰の刑死を知り、周布政之助に宛て、「我師松陰  
 之首、遂ニ幕吏之手ニカケ候之由、防長恥辱口外仕候モ汗顔之至  
 ニ御座候、実ニ私共モ師弟之交ヲ結ヒ候程之事故、仇ヲ報イ候ラ  
 ハテ安心不仕候(安政六年十一月二十六日付、周布政之助宛高杉  
 晋作書簡、周布家文書三四三、山口県文書館蔵)と、仇を報いる  
 という決意を述べている。

## 二 高杉晋作と奇兵隊結成への過程

晋作は、万延元年(一八六〇)二月十一日、明倫館練兵場に入  
 学、教練御用掛を命じられた(『高杉晋作史料』一、八八)。三月  
 二十日には、明倫館大学寮舎長となつている(同右、八九〜九  
 〇)。

長州藩では、萩で建造した洋式軍艦丙辰丸の遠洋航海の実施  
 を計画したが、晋作は、閏三月七日、乗組員の一人に選ばれた(同  
 右、九二)。



同月二十三日、晋作は長州藩萩野流砲術家で新式導入を否定していた守永弥右衛門に書簡を書き、「鎖国ナレハ彼レヲ知ルニ不及候得共、航海ヲ致シ候得ハ、自ラ軍艦制作ナトニ至テハ、彼レモ不取ヲ得サルコト出来ハ不仕哉（『高杉晋作史料』一、九六）」と、鎖国をしているのであれば西洋技術を知らなくてもよいが、航海をしているのであれば、軍艦製造においては西洋技術を取り入れられないわけにはいかないと述べている。晋作の西洋学志向がうかがえる。

四月五日、晋作等は萩の恵美須岬に停泊中の丙辰丸に乗船した。晋作は、この航海に際して記した「東帆録」の序文に「大丈夫生于宇宙間、何久事筆研（『高杉晋作史料』二、五）」（大丈夫宇宙の間に生まれ、何ぞ久しく筆研に事へん）と、気概を述べている。しかし、航海は難航し、江戸には六月四日に着いた。晋作は江戸に到着するなり、軍艦操練所での修業を辞している。

断念した理由については、晋作の伝記では様々な解釈が行われているが、それらを比較検討した牛見真博氏は、海事への関心はそこで途切れた訳ではなく、継続していたことを明らかにしている。<sup>(4)</sup>晋作の後の行動を長期的スパンからみても、妥当な解釈と考えられる。

晋作は、この時は、文学・撃剣で身を立てようとし、各地の知名士を訪ねて、十月二十日前後に、萩に帰った。十一月八日、明倫館入込生となっている（『高杉晋作史料』一、九九）。

文久元年（一八六一）三月十一日、世子毛利元徳の小姓役を命じられた（同右、一〇四）。小姓役期間中のことを記した「誓御日誌」には、三月二十二日には、松陰の「幽室文稿」を読んだとある（『高杉晋作史料』二、四〇）。二十五日には、「松陰年譜草稿」稿近日之内成就セネハ靈魂（二）対シテスマヌナリ、心自警（同右、四一）と、松陰の年譜の完成に取り組み、夜は「幽室文稿」を読んでいる。晋作が取り組んだ松陰の年譜は、「松陰年譜草稿」（『定本吉田松陰全集』九、五六九～五七三）として、未完成であるが残されている。

晋作は、七月三十日、江戸に出て小姓役の勤務についた。この間、九月三十日夜には、「坤輿図識」<sup>こんよ</sup>を読み、十月一日に一卷を卒業している。二日には二巻、三日には三巻を卒業している（『初番手行日誌』『高杉晋作史料』二、七四～七五）。「坤輿図識」は全三巻なので、読了したことになる。「坤輿図識」は、松陰が熱心<sup>(5)</sup>に研究し、松下村塾でテキストに用いたことのある書物である。晋作も世界認識を高めようとしていたことがわかる。

十二月二十三日、晋作に幕府の上海への調査団派遣に随行するよう命が下った（『高杉晋作史料』一、一一三）。上海への使節団は、翌文久二年（一八六二）四月二十九日、長崎を出港した。晋作は上海において、租界の体験から、植民地化の厳しい実情を数多く見聞した。その結果、次のような認識に達している。

支那之衰微は形勢略記に申候通に候。然るに如此衰微せし

は何故ぞと看考仕候に、必竟<sup>ひつきよう</sup>彼れ外夷を海外に防ぐ之道を知ざるに出し事に候。其証拠には、万里之海濤を凌ぐの軍艦運用船、敵を数十里之外に防ぐの大砲等も制造成さず、彼邦志士之訳せし海国図志なども絶板にし、徒<sup>いたずら</sup>に(固陋之説を僻氣象を以て割注)唱へ、因循苟且<sup>こつしよ</sup>、空しく歳月を送り、断然太平之心を改め、軍艦大砲製造し、敵を敵地に防ぐの大策無き故、如此衰微に至り候事也。夫故、我日本にも已に覆軼を踏むの兆有れば、速に蒸気船の如き(以下欠)(遊清五録)『日本近代思想大系1開国』岩波書店、一九九一年、二二六―二二七頁)

このように晋作は、清国が衰微した理由について、海防に留意しなかつたためであり、「海国図志」を絶板にして、固陋の説を唱えたためであるとしている。「海国図志」は、魏源が編纂した世界の地理・歴史書であり、松陰はアメリカ部の全文を筆写し、生涯校訂を続けた愛読書である。<sup>(6)</sup>晋作も「海国図志」を対外的危機に備えるための重要な書物として認識いたことが判明する。

また、「支那にて外国之事情見聞致し、兎角海軍を起さねハ不相叶ト見込、帰掛崎陽ニ於て独断ニて蒸気船壹艘御買入之条約致し候」(慶応元年三月五日付、佐世八郎宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、二七七)と、海軍の重要性に着眼し、長崎において独断にて蒸気船を買い入れる約束をしている。

帰国した晋作は、尊王攘夷運動に邁進した。十二月十二日に

は、品川御殿山に建設中のイギリス公使館焼き討ちを行っている。これは「狂拳」と呼ばれているが、この場合の「狂」は、陽明学の概念であり、ひたすら理想を求めるもので、冷徹な計画性を持った行動であることに注意する必要がある。

文久三年(一八六三)一月には、晋作は、松陰墓の若林村大夫山への改葬を行っている。<sup>(7)</sup>改葬は、一月十一日、改葬予定地若林の下見、十二日、小塚原の遺骸の掘り出し、十三日、遺骸の若林への移送と仮埋葬、十六日、改葬の儀式が行われ、晋作は、十三日の遺骸の移送に従事している。

尊王攘夷運動の高揚の中で、晋作は三月十五日、一〇カ年の賜暇を願い出で、許されて、四月十日には萩に帰った。晋作は、松本村弘法谷に移り住んだ。この地を選んだのは、京都の久坂玄瑞・寺島忠三郎に宛てて、「此節ハ松陰先師之墓下ニ草堂を借得、幽栖罷在候、先師之遺玉読過候、頭毛ノ伸迄勉強仕候落着ニ御座候」(文久三年四月二十五日付、久坂玄瑞・寺島忠三郎宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、一五〇―一五一)と書いているように、松陰の墓近くに居を構え、その著作をじっくり読みたいと考えたからである。

この間、長州藩は、五月十日、同二十三日、同二十六日、下関海峡で外国船を砲撃し、攘夷を決行した。これに対する報復攻撃が六月一日、五日行われ、長州藩は完敗した。晋作は、四日出仕の沙汰を受け、六日、山口において防禦のため下関出張を命じ

られた(同右、一五四〜一五五)。その夜午後八時、下関竹崎の白石正一郎宅に着き、奇兵隊の結成に取りかかった(『定本奇兵隊日記』上、マツノ書店、一九九八年、七頁)。

七日、一五人が入隊し、奇兵隊が結成され、晋作は、いわゆる「奇兵隊結成綱領」を書いた。そこでは奇兵隊の趣旨が、「奇兵隊之儀ハ、有志之者相集候義ニ付、藩士・陪臣・軽卒不撰、同様ニ相交り、専ら力量を尊ひ、堅固之隊相調可申ト奉存候」(文久三年六月七日付、高杉晋作書状、毛利家文書)と、有志による実力主義の隊であると端的に述べられている。ここでは、武士の間での身分を問わないとあり、募集対象は武士としているが、慶応元年(一八六五)一月六日の大田市之進・山県有朋・熊谷某宛書簡では、「暫く穢非之者を除之外、士庶を不問、奉を厚くして専強健之者を募り、其兵を馭するや、賞罰を嚴明ニセバ、縦へ凶險無頼之徒ト雖も、之レガ用をなさざるといふ事なし」(『高杉晋作史料』一、二七二)と、しばらく被差別部落の者を除くの外、武士・庶民を問わず、強健の者を募ると、募集対象に庶民を含めている。事実、六月八日、白石正一郎、弟の廉作、井石綱右衛門、山本孝兵衛など、町人が入隊している(『白石正一郎日記』『白石家文書』下関市教育委員会、一九六八年、九五頁)。

奇兵隊の発想は、松陰に発していると考えられる。松陰は、安政五年(一八五八)五月中旬の「愚論」の中で、次のように論じている。

当今兵力单弱の故は、將其の人に非ざると、兵を選ぶこと精しからざるとの二つに御座候。幕府にても諸藩にても、番衆組付などと申し候隊中には、老人病者辱弱無芸の者も混じ、又千石何十人、万石何百人と申す軍役の定め之れあり候へども、万石以上領地之れある分は可なり人数も之れあるべく候。万石以下、又諸藩千石以下の士は軍役は皆虚額のみ相成り、仮令頭数ありとも精兵は何程も之れなく候。夫れ故此の局を一変し、万石以上以下に限らず、材武にして随分一戦仕るべしと願出で候ものへ、力に任せ有禄無禄武士浪人に拘らず調募させ、千夫長百夫長其の大小に準じ、賊艦一隻二隻乃至三五隻攻取り候事を委任仰せ付けられ候はば、世禄大身より下賤の徒浮浪に至るまで、悉く奮発国の為めに力を致し候様相成り申すべく候。調募の兵の給資は食禄無用の徒の糧を減じ、彼れを取り此れに与ふる法を立つべし。此の策施され候はば將其の人を得、選兵其の精を極め、戦の一條何も差障之れなき事に御座候。(『愚論』『吉田松陰全集』四、三四三)

このように松陰は、従来の封建身分制軍隊は、軍役の規定に従って人数を出す数合わせであり、数は多くても強力な軍にならないため、これに代わって武勇に優れた有志を採用すれば、国のために奮発するようになる(8)と述べている。有志を登用するのちの奇兵隊につながる発想が見られる。晋作は、八組の士が畏縮し



ている状況の中で、有志による実力主義の奇兵隊を創設したのである。奇兵隊に続いて諸隊が結成されていき、長州藩の強力な軍隊として発展を遂げていった。

奇兵隊の画期的意義について、長く長州藩で活躍した中岡慎太郎は、慶応三年（一八六七）九月二十一日付、大石弥太郎宛書簡「兵談」（『中岡慎太郎全集』勁草書房、一九九一年、一八三頁）の中で、次のように述べている。

一、長州、御国（土佐）と同じく、大禄士分多く、肉食因循にて、歩卒の業を恥ぢ、中々兵制難立、此の勢を高杉疾く洞見せし故に、奇兵隊を始めとし、諸隊を作りたり。

一、諸隊なる者は陪臣、足輕、百姓を不論、器により卒となり、長となり、全く有志家の心の儘に取立たる者故、将卒一致、追々強兵となり、攘夷の時も、内戦の時も、四境の追討も皆此の隊の功をなし国威を耀したり。

一、長防兵制の変革は、来原良蔵以来の事にて、余程世話したれども、中々改まらず、依て此の隊を立て亥年夷人と戦争、子年京師又馬関の戦争、丑年内戦、皆此の隊が勝利を得し上、再討の事起り、之が為め漸く五十石一人の制なり、全く軍改まりたり。然れども上中士は未だ因循多く、自然度外の物となる。

このように中岡は、長州藩は大禄の武士が多く、因循で歩兵の業を恥じてなかなか兵制改革が進まず、この状況を晋作は早く

から見抜いていたため、奇兵隊を始めとし、諸隊を作ったとしている。武士は馬に乗って戦うのをステイタスとしていたため、西洋兵制では兵士は銃を持って地面を走り回らねばならず、来原良蔵が取り組んだ西洋兵制への改革にも抵抗が強く、改革は進まなかった。この状況を晋作は克服したと評価しているのである。

また、諸隊は陪臣、足輕、百姓を問わないで、実力により下級の兵卒になったり、隊長になり、志の心のままに取り立てたため、将校と兵卒が一致し、追々強兵になったとしている。そして、攘夷実行の時も、元治の内戦の時も、慶応二年の幕長戦争の時も、皆この諸隊の功によって藩威を輝かしたとしている。

文久三年八月十八日、政変により長州藩は京都における政治勢力を奪われた。その回復を目指すべく進發論が起ったが、慎重論の晋作はその説得を命じられた。

元治元年一月二十八日、説得が失敗に終わると、晋作はそのまま無断で脱藩した。藩に戻ると、三月二十九日、脱藩の罪で野山獄に入獄させられた。

晋作はその日、「先生を慕ふて漸く野山獄」と詠んだ（『投獄文記』『高杉晋作史料』二、一五九）。五月二十日頃から、杉民治に頼まれ、松陰の文稿の校閲や謄写を始めており、その作業に没頭している（『元治元年五月二十五日付、杉民治宛高杉晋作書簡』『高杉晋作史料』一、二四八～二四九）。

長州藩は、進発論が高まり、七月十九日、禁門の変が起こったが敗退し、七月二十三日には、長州藩追討令が下った。また、八月五日からは、四国連合艦隊による下関攻撃があり、長州藩は完敗し、停戦交渉が行われることになった。そこで晋作に交渉役が命じられ、八月八日、晋作が正使として第一回交渉が行われた。第二回は欠席したが、八月十四日、第三回交渉が行われ、講和が成立した。

第一次長州出兵の中、長州藩では、幕府に絶対恭順を唱える「俗論派」が台頭し、武備恭順を唱える「正義派」は弾圧されていった。晋作は、十月二十四日、萩を脱走した。そして、筑前に潜伏した。

### 三 高杉晋作と下関拳兵

筑前に潜伏していた晋作は、「俗論派」による「正義派」に対する厳しい弾圧を知り、長州藩に帰りこれを回復しようとした。元治元年十一月二十五日、下関に帰り、諸隊に呼びかけて拳兵の準備に取りかかった。しかし諸隊は、奇兵隊総管の赤祢武人が進める藩政府との調和論に期待する動きが生じてきた（奇兵隊其外四隊之事并高杉・赤祢一件「毛利家文庫」）。実際の藩政府は、早い段階から諸隊の鎮圧準備に着手していたのであるが、赤祢にはそのことは秘して、調和論を進めるポーズを示していたのである<sup>(10)</sup>。

「俗論派」政府を全く信用しない晋作は、十二月十二日、諸隊を訪れ、赤祢の調和論を批判し、決起を呼びかけたが、諸隊は時期尚早として反対した（堀真五郎『伝家録』堀栄一、一九一五年、一〇三頁）。晋作は、単独で拳兵の準備を進め、十五日夜、長府の功山寺で拳兵した。その数は、遊撃隊と力士隊合わせて八〇人と言われている（人数については他説もある）。

藩政府軍に比して絶対的に不利な数であり、さらに「俗論派」の背後には、第一次長州出兵で出陣してきている征長軍もいる。このような状況で晋作が拳兵を決断した背景には、松陰の影響が考えられる。松陰は晋作に、「死して不朽の見込あらばいつでも死ぬべし。生きて大業の見込あらばいつでも生くべし」（安政六年七月中旬、高杉晋作宛吉田松陰書簡『吉田松陰全集』八、三六八）と教えていた。これにより生死を度外視して行動を起こし、状況を切り開いていくしかないと考えたと思われる。晋作が死を決意して拳兵していることは、大庭伝七に宛てて、万一場合の葬儀と墓の建設を依頼していることでもわかる（元治元年十二月中旬、大庭伝七宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、二六五～二六七）。

十六日朝、晋作らは下関の新地会所を襲い、役人を追放して統制下に置いた。十九日には、晋作は死士を募って、三田尻海軍局の軍艦を奪取しようとした（「懐旧記事」『山県公遺稿・こしのやまかぜ』東京大学出版会、一九七九年、一一一～一二二頁）。晋

作は石川小五郎等と共に海路三田尻海軍局に走り、二十日午前一時、諸隊の者二〇人を癸亥丸に、浪士細川左馬之介等三人を庚申丸に各搭乗させ、二艦を奪おうとした。船将等は同意し、晋作等はついに癸亥丸を奪った（『伊藤博文談話』『修訂防長回天史』六、四〇六頁。伊藤は三艦奪ったと回想しているが、実際は二艦である）。

たまたま風波のため準備が遅れ、二十四日、癸亥丸が先ず解纜した。そして、二十六日夕、下関に着いた（『諸隊鎮静沙汰控』『山口県史料編 幕末維新』六、山口県、二〇〇一年、三二〇頁）。庚申丸の船将佐藤与三右衛門は、晋作の挙に同意したが、水夫が亡命したので遅れ、二十七日の段階では一艦のみの出張となっている（元治元年十二月二十七日付、吉富藤兵衛宛所郁太郎書簡〔『修訂防長回天史』六、四三九頁〕<sup>12)</sup>）。

癸亥丸は、慶応元年（一八六五）一月二十八日、萩沖に現れて空砲を放ち、「俗論派」を威圧した（『日記』『山口県史料編 幕末維新』六、三五六頁）。

以上のように、晋作がいち早く軍艦を奪うことを決行したのは、従来から海軍の重要性に着眼していたことが背景にあったと考えられる。

下関に帰った晋作は、十二月二十七日、山口の吉富藤兵衛に宛て軍資金の借用を願う密書を書いている（吉富藤兵衛宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、二六七～二六八）。晋作が豪農に頼

ろうとしていることがわかる。

また、慶応元年一月には、「討奸檄」を作り、「俗論派」を批判し、拳兵の正当性を主張している。そこでは、「御両殿様御先祖洞春公御遺志を継せられ、御正義御遵守被遊候処、奸吏とも御趣意に相背き、名は御恭順に託し、其実ハ畏縮偷安<sup>とっあん</sup>之心より名義をも不顧、四境の敵に媚ひ、ほしゐま、に関門をこぼち、御屋形を破り、剩へ正義の士を幽殺し、（中略）御両殿様の御正義を天下万世に輝し奉り、御国民を安撫せしむる者也」（山口県立山口博物館蔵）と、毛利敬親・元徳の正義を天下に輝かし、民衆を安んずる姿勢をアピールし、民衆の支持を得ることに努めている。

晋作は、民衆の支持について、「是亦諸隊壯年英氣の士多く、且民心も帰し候二付、遂ニ此一大挙に相至候」（慶応元年三月五日付、佐世八十郎宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、二八〇）と、民心が帰したことによって勝利することが出来たとして、その意義を高く評価している。

晋作の挙兵には同調せず、美祢宰判の伊佐へ転陣した諸隊は、十二月二十二日、萩政府と応戦することを決断した。翌一月六日夜、諸隊は、絵堂の萩政府の鎮静軍を夜襲した。さらに十日の川上口の戦い、十四日の呑水口の戦いで勝利した。同日、晋作は下関から大田<sup>おおだ</sup>に着き合流した。十六日、諸隊は赤村の戦いに勝利した。諸隊は萩に迫り、二月十四日夜、「俗論派」の首領は萩を脱出した。これは、内戦終息の重要な画期となった。<sup>13)</sup>

内戦が終息すると晋作は、突然隠退を決意した。このままでいけば、「正義派」政府を成立させた最大の功労者として政府に迎えられるが、そうした煩わしい仕事を回避したいと考えたのである。相談にあずかった佐世八十郎は、晋作がかねて希望していたイギリス留学を勧めた。晋作はこれに応じて、「此度英行も弟二は大任なれども、是迄之罪をツクナウ一端とも相成らんカト相考候、馬関も孰れ開港ニ相成らん、其節ハ御国の御為ニ相成候事も出来ぬとも（自外尽力一行間注）不被申候」（慶応元年三月五日付、佐世八十郎宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、二八二）と、将来の下関開港も見据えてイギリス行きを希望した。晋作は、伊藤博文に同行を求めた。伊藤は直ちに賛成した（『伊藤博文伝』上、一九四頁）。

晋作と伊藤は、三月二十日、下関から長崎に向かった。長崎に到着すると、トーマス・グラバーを訪問し、洋行の希望を打ち明けて、渡航の斡旋を依頼した。この時長崎にいた函館駐在イギリス領事ラウダーは、鎖国の永続すべからざることを説き、今は洋行するよりも国内に留まり、下関開港に尽力してはどうかと再考を促した。二人は、下関開港の方策を講ずることに決し、下関に引き返した（同右、一九六～一九七頁）。

晋作は下関開港論を唱えたが、それに反発する人々によって危険な状況となった。そのため暗殺を恐れ亡命した。四国等で逃避行を続けた後、五月下旬から六月初めの頃、下関に帰った。

九月二十六日、晋作は海軍興隆御用掛に任じられ、また、御手廻格に加えられ、御用所御国政方に任じられた（『高杉晋作史料』一、三〇〇～三〇三）。藩政の要職に就き、政策を担当している。この間、十月二十五日には、桜山招魂場において松陰の祭を執行している（『白石正一郎日記』『白石家文書』下関市教育委員会、一九六八年、一二六頁）。

また、十一月三日には、木戸孝允に宛てて書簡を書き、かがわ嘉川浪士隊の沢田真太郎が、「弟之処にて読書、松陰先師之遺教を受度との事に候」（慶応元年十一月三日付、木戸孝允宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、三一五）と、松陰の遺教を受けたいと言ってきたことを知らせている。晋作が、松陰の教えを受け継ぐ第一人者として認識されていたことがわかる。

慶応二年一月二十一日、薩長同盟が締結され、薩摩藩との提携が重要な課題となった。晋作は、二月二十日、木戸に宛て、「英人薩士ト会和の事御座候由、弟も知らぬ顔にて其席へ加り見度候」（慶応二年二月二十日付、木戸孝允宛高杉晋作書簡、同右、三三二～三三三）と、薩摩へ行きたい希望を述べた。二月二十七日、藩政府は、薩摩藩へ晋作を正使、伊藤を副使として派遣することとした。二人は三月二十一日、下関から乗船し、長崎に向かった。長崎では薩摩藩屋敷を訪問し、薩摩藩主への親書伝達の使命を告げて、鹿児島行きを依頼した。しかし、突然出向かれては意外の齟齬を生ずるかもしれず、この地で用向きを済まされ



てはと言われた。二人はその言葉に従い、親書の伝達を求めた（『伊藤博文伝』上、二五六頁）。

晋作は、木戸と井上馨に宛て三月二十八日に書簡を書いて使命について復命するとともに、「弟事ハ近々船便有之次第、上海迄罷越候事御座候」（慶応二年三月二十八日付、木戸孝允・井上馨宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、三四三）と、上海まで行きたい希望を述べた。これは、再び洋行する計画で、その斡旋を依頼しようとしたものである。

四月二十二日、晋作と伊藤の洋行も許容され、ロンドン留学費として一五〇〇両を藩政府から支給することになった（『伊藤博文伝』上、二六七～二六八頁）。しかるに幕閣は、四月二十一日までに長州藩父子や三支藩主、岩国の吉川経幹等つねまさに広島城下に出頭せよと命じ、幕長戦争の機運が高まった。よって晋作は、洋行を中止し、下関へ戻ることにした。その際、グラバーから蒸気船オテント号を独断で購入した。オテント号は、のち丙寅丸へいゐんと改められ、幕長戦争で活躍することになる。

#### 四 高杉晋作と幕長戦争<sup>14</sup>

慶応二年五月、幕長戦争の機運が高まる中、晋作は五月二十七日、海軍御用掛に任じられた（『高杉晋作史料』一、三六二）。海軍について晋作は、六月五日、木戸に、「過日御頼申上置候一件、弟等中々海軍総括などハ却て迷惑仕候得共、何トカ名を附ケ、海

軍々務之差図被致候様御周旋奉頼候」（慶応二年六月五日付、木戸孝允宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、三六三）と、海軍の軍務の差図をしたいと希望を述べている。翌六日、晋作は海軍惣督に任じられた（同右、三六四）。

七日夜には、前原一誠に宛て、「危急の秋ときに付、力の有丈は強勤可致と憤發罷在候、不相替御示教之程奉願候、昨夜も御互に申候、従斯は海軍を主とし陸軍客と相成候形勢にて」（慶応二年六月七日夜、前原一誠宛高杉晋作書簡、同右、三六五）と述べ、海軍に尽力する決意を表明し、これからは海軍を主とし、陸軍が客となる形勢であると見通している。

幕長戦争は、六月七日、幕府蒸気軍艦の上関宰判熊毛半島先端および大島宰判安下庄あげのしょうへの艦砲射撃により開戦した。六月八日夕方、幕府海軍は、大島宰判久賀村くかを砲撃した。この情報は、十日午後六時、山口の藩庁政事堂に到来した。その夜、藩庁政事堂は応戦の決断をし、次のような指令を発した。

- ① 十一日正午、丙寅丸を三田尻から出航させ、午後四時に室津・上関間に着くので、大島郡の地理・海のみちのりに詳しい者を一〜二人乗り組ませる。
- ② 洪武隊と南（第二）奇兵隊は、応援のため出陣する。
- ③ 丙寅丸は応援のため、大島郡へ差し越す。晋作は丙寅丸に乗り込み、乗組の面々は、晋作の差図を受ける事（四境戦争一事 大島郡「毛利家文庫」）。

晋作は十二日正午、遠崎沖に着いた。その夜、丙寅丸は久賀沖へ出動し、翌十三日午前二時頃、幕府軍艦へ大砲を撃ちかけた。この奇襲作戦は、幕府軍艦は、長期碇泊する場合には、蒸気機関の火は落とすという法則を、長州藩首脳は情報収集とその分析の結果見出し（慶応二年五月三日付、高杉晋作宛木戸孝允・広沢真臣・山田右衛門書簡并高杉晋作返書「年度別書翰集 廿五」毛利家文庫）、そのことを共有し、それに基づいて決行したものである。<sup>(15)</sup>軍艦のことを熟知している、晋作の冷徹な判断で行われていることに留意する必要がある。晋作は、丙寅丸に乗って、十四日夜、下関に帰った。

幕長戦争小倉口の戦いは、奇組<sup>やまのうち</sup>山内梅三郎が総指揮官であったが、名目的なものであり、晋作が参謀として実質的に指揮をした。晋作は六月十五日、奇兵隊軍監山県有朋と協議して、小倉攻撃の方略を定めた。十六日、晋作は長府毛利家に至り、長府藩の出陣を要請し、報国隊が出陣することになった。

十七日午前二時半、長州藩海軍五艦は下関を出港した。午前六時、田野浦と門司の小倉藩軍を砲撃し、午前七時、陸軍先鋒の奇兵隊等が上陸した。長州軍は散兵戦術を駆使し、小倉藩軍は敗退した。長州軍は、暫く退いて時を見て進撃することに決定し、午後四時過ぎ門司の人家に放火し、順々に下関へ帰った。放火は幕府軍が最初の大島口の戦いで大規模に行ったため、長州軍が行う口実を与えていたが、門司・田野浦の人家焼失については、民

衆が困窮するので、戦争が終わり日常へ回復した後は修復するとの一書を残した（「四境戦争一事 馬関口」毛利家文庫）。修復の実施を伝える史料は現在の処見出しえないが、長州軍が民衆に対する配慮を行なっていることが判明する。

晋作は、「小倉戦争差図書」の中で、「田浦・文字<sup>(門司)</sup>其他浦々へ廻り、士民困窮之者へ救ひ米等を渡し、漢高漢中二入し時の如く人望を得るの策を成すへし」（『高杉晋作史料』一、三七九）と、士民の困窮者へ救い米等を渡し、漢の高祖劉邦が漢中に入った時に、秦の時代の事細かな上に苛烈な法律を、「法三章」にまとめ、民心を得た故事のように、人望を得る策を実施すべきとしている。

このように民衆を重視する視点は、松陰の影響が考えられる。松陰は、安政六年四月二十八日、「己未文稿」（『吉田松陰全集』五、三〇四、三三二～三三三）において、明の徐九経を引用して、「民此の色あるべからず、士此の味なかるべからず」と、民に菜の色のような青い色をさせてはならない、士は質素な菜の味を忘れるべきではないとしている。松陰は、常に民に配慮すべきという視点を主張しており、軍事の中においても民に配慮する作戦計画は、晋作もその影響を受けていると考えられる。

小倉口の戦いは、七月三日の大里村戦争、七月二十七日の赤坂戦争と続いたが、八月一日、小倉藩は城を自焼し、以後は内陸に移って抗戦した。晋作は、攻防が始まった頃から体調を崩し、七月二十二日には、藩医の来診を乞うている（『白石正一郎日記』

『白石家文書』下関市教育委員会、一九六八年、一四〇頁)。それでも七月二十七日の赤坂戦争には参戦し、大里の本陣で指揮をとっている(慶応二年十二月四日付、坂本権平、一同宛坂本龍馬書簡『坂本龍馬全集 増補改訂版』光風社、一九八〇年、一三〇頁)。

しかし病状は悪化して病臥するようになり、参謀の任は全て前原一誠に託して保養に専念した(慶応二年九月二十九日付、井上馨宛高杉晋作書簡『高杉晋作史料』一、三九九)。病臥中も、「講孟余話」を一覧したいとして、その借金を久保松太郎へ依頼している(慶応二年十月頃、久保松太郎宛高杉晋作書簡 同右、四〇四)。以後も療養に努めたが、慶応三年(一八六七)四月十四日朝、死去した。

### むすび

以上、高杉晋作の吉田松陰のもとでの修学状況、およびその思想の継承について検討した。解明した諸事実をまとめておくと、次の如くである。

一、晋作は松陰のもとで熱心に修学し、その論は深化し、松陰に影響を与えるほどになっている。とりわけ松陰の唱える幅広い海外認識の必要性、西洋に学ぶ姿勢、航海・海軍の重要性を学んでいると考えられる。

二、晋作は、上海渡航から植民地化の危機と、海防とりわけ海軍

の重要性を実感し、尊王攘夷運動に邁進した。そして、松陰の封建制軍役ではなく、武勇に優れた有志を採用することによって強力な軍隊を作るといふ論を継承して、有志による実力主義の新しい軍隊である奇兵隊を結成した。

三、長州藩の政治行動に対して幕府の出兵が行われ、藩内では、それに恭順する勢力が台頭したが、晋作は、正当性への確信と、松陰の生死を度外視して困難に立ち向かえといふ教えを守って決起し、諸隊と民衆の力を得て、恭順派勢力に勝利し、幕府に抗戦する政権が成立した。

四、幕長戦争においては、長州藩は諸隊の西洋式戦術への習熟をもとに勝利した。また晋作は、人望を得るといふ民衆に配慮しつつ行う作戦計画を立案しており、民を重要視する松陰の視点を継承しつつ戦闘が行われていることが注目される。

### 注

(1) 高杉晋作に関する史料集としては、堀哲三郎編『高杉晋作全集』(新人物往来社、一九七四年)、一坂太郎編・田村哲夫校訂『高杉晋作史料』(マツノ書店、二〇〇二年)がある。

(2) 「奉弾正益田君書」末尾の「松陰評」では、「強兵本論」と記してあり、字句に相違が見られる。この朱筆添付は松陰自筆ではないため、「暢夫の対策を評す」「戊午幽室文稿」に記している「強兵の末論」のほうを採用すべきであろう。

- (3) 牛見真博「近代造船の先駆者・渡辺蒿蔵(上)―幕末長州藩における海事志向の影響を踏まえて―」(『大島商船高等専門学校紀要』五一)、牛見真博・國枝佳明「高杉晋作における海事志向とその意義―船乗りにならなかつた理由の検討を踏まえて―」(『山口県地方史研究』一二二)。
- (4) 牛見真博・國枝佳明「高杉晋作における海事志向とその意義―船乗りにならなかつた理由の検討を踏まえて―」(『山口県地方史研究』一二二)。
- (5) 松陰と「坤輿図識」のかかわりについては、拙稿「吉田松陰と『坤輿図識』」(『至誠館大学吉田松陰研究所紀要』第二号)参照。
- (6) 松陰と「海国図志」のかかわりについては、拙稿「吉田松陰と『海国図志』」(『至誠館大学吉田松陰研究所紀要』第三号)参照。
- (7) 松陰墓の改葬日については、従来多様な説があったが、松本勇介「新出史料による吉田松陰改葬日の見直し」(『日本歴史』八五三)により、改葬に従事した玉木彦介の日記の詳細な分析に基づいて、文久三年一月十六日であることが確実となった。
- (8) 「愚論」と奇兵隊の関係については、拙稿「吉田松陰の西洋兵制志向」(『至誠館大学吉田松陰研究所紀要』第五号)参照。
- (9) 奇兵隊および諸隊については、拙稿「諸隊の結成と展開」(『山口県史通史編 幕末維新』山口県、二〇一九年、三八六―四〇八頁)参照。
- (10) 元治元年の藩政府の内情については、拙稿「第一次長州出兵と長州藩」(『幕末維新の政治過程』吉川弘文館、二〇二二年)参照。
- (11) 三田尻海軍局は、文久三年十一月三日、三田尻御船倉を改称したもので、洋式を採用し、松島剛蔵に管轄させた(『異賊防禦御手当沙汰控』毛利家文庫)。同月六日、松島は海軍頭取役となり、海軍の改革を進めた(小川亜弥子「松島剛蔵と洋学―長州藩洋学者が歩んだ尊王攘夷派への道―」『洋学』二二三号)。
- (12) 軍艦奪取時に抵抗の動きがあったことは、「両公伝史料」一五六八(山口県文書館蔵)参照。
- (13) 元治の内戦の経過については、拙稿「長州藩元治の内戦と抗幕政権の成立」(『幕末維新の政治過程』吉川弘文館、二〇二一年)参照。
- (14) 幕長戦争については、拙著『幕長戦争』(吉川弘文館、二〇一三年)参照。
- (15) 高杉晋作の幕府軍艦奇襲については、拙稿「長州藩の情報収集能力―高杉晋作の幕府軍艦奇襲の背景―」(『幕末維新の政治過程』吉川弘文館、二〇二一年)参照。